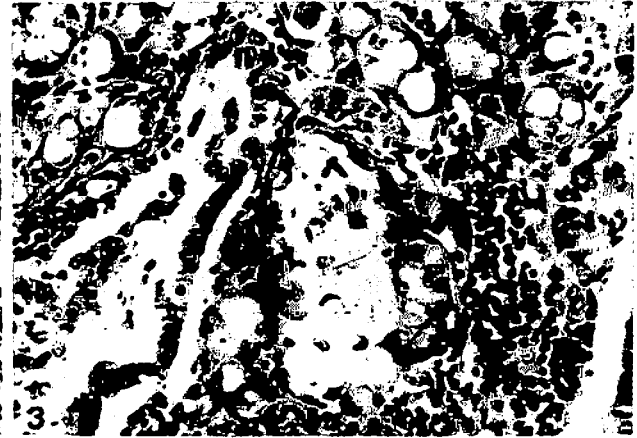
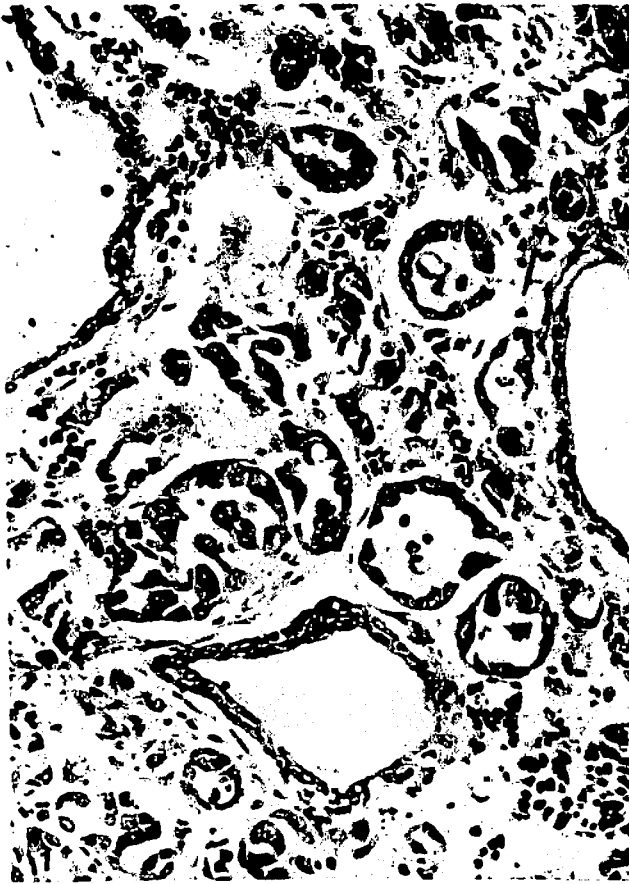


イヌの前立腺

山口大学農学部家畜病理学教室出題

第19回獣医病理学研修会標本No.312



動物：イヌ，雑種，雄，13才。

昭和52年9月22日，腹部の疼痛が酷く畜主の希望により開業獣医師のもとで安楽死。同日剖検。

剖検所見大要：開腹時，黄色透明腹水を多量に容れていた。肝臓は表面小顆粒状で硬度を増し，また1箇所表面より陥凹する灰白色円形の変色病巣を認めた。腎臓は硬度を増し，表面には小陥凹が多発していた。前立腺は小鶏卵大で剖面には不整形の空洞がみられ灰黄色の混濁する液を容れるが，その他尿路系には著変を認めず。

組織学的所見：前立腺には比較的大型の明るい核を有する上皮性細胞が腺腔構造をもって増殖し（写真1，H-E， $\times 100$ ），部位によっては好酸性の豊富な胞体をもつ大型の細胞が繊細な結合織とともに島状にあるいは浸潤性に増殖する比較的未分化な像を認めた（写真2，H-E， $\times 400$ ）。

著しい結合織の増生をともなって細胞が管腔構造を形成し，管腔内に脱落した細胞および分泌液を容れる所見もみられ，また増殖細胞の印環細胞化への傾向の強い部位をも認めた（写真3，H-E， $\times 100$ ）。

腫瘍組織間質にはプラズマ細胞の浸潤が顕著であり，前立腺部の尿道粘膜の角化像を認めた。

肝臓にみられた灰白色病巣部では立方上皮様の細胞が管腔構造を形成し増殖する所見を認め胆管腫と診断した。

診断：前立腺の組織所見では腺腔および管腔構造を形成する部位が多くみられ，また印環細胞化の傾向もみられるもので前立腺癌と診断した。家畜の前立腺癌の発生はイヌを除いては極めてまれで，またイヌにおいても比較的少ないように思われる。本症例は前立腺癌と肝臓の胆管腫との発生がみられる重複腫瘍に入る。